

⑥ 石巻市

文化財だより

—多 福 院 特 集 (4号) —

—昭和50年度文化財調査特集 (5号) —

もくじ

日輪山多福院の板碑群	2
多福院文書・その他の文化財について	10
石巻市稲井地方の地質	14
東浜地区生産民具（漁具）収集調査報告	18
稲井地区古文書分布調査	22
目 錄	25
石巻の店蔵〈高橋茶舗〉	27

はじめに

社会教育課編集室

今回は編集に思ひの外、多くの時間がかかり、発行が大変遅れてしましました事を、始めおわび申上げます。

さて、この文化財よりも、関係各位のご協力をもちまして、今号が第四冊目の発刊となりました。

年二回の発行予定で編集を進めておりましたが、種々の都合から、第四号、五号の合併号という形で、発刊することとなりました。

早めに原稿をご提出いただいていた、文化財保護委員各位、ならびに読者の方には深くおわびを申し上げる次第でございます。

今回の内容は、第四号が石巻市指定文化財多福院板碑群特集、第五号が昭和五十年度文化財調査特集という内容になつています。

多福院板碑群は、昭和五十年六月一日付で、石巻市指定有形文化財として一括指定を受けたもので、石巻市の第一号指定文化財であります。

ご存知のように、石巻市一帯の地域は古くから、記念碑等の用材である粘版岩（粘井石）の産出地であり、また、中世には、義西所領域の中心として繁榮したため、市内には、多数の中世板碑（石製卒塔婆）が分布しています。

昭和四十八年度以降、石巻市教委が、文化財保護委員を中心とし、一部の分布調

査を実施しておりますが、その数は最終的には、四百基を越すであろうと想定されています。

これら中世板碑は、古文書がほとんど見つかっていない当地域の中世史を明らかにする上で、唯一の書かれた資料であり、その保護を進める事は、非常に大きな意義があります。

多福院板碑群が、市指定第一号文化財として、しかも群として一括指定された事は本地域、また北上川下流域の板碑文化を明らかにする上で、また保護を推行するための行政上の一布石として、その効果は大きいものがあろうかと思われます。

昭和五十年度文化財調査報告は、委託調査を実施した五件のうちから、四件についてその成果をまとめたものです。

残り、一件については、保護上の理由から掲載する事は、きけましたのでご了承下さい。

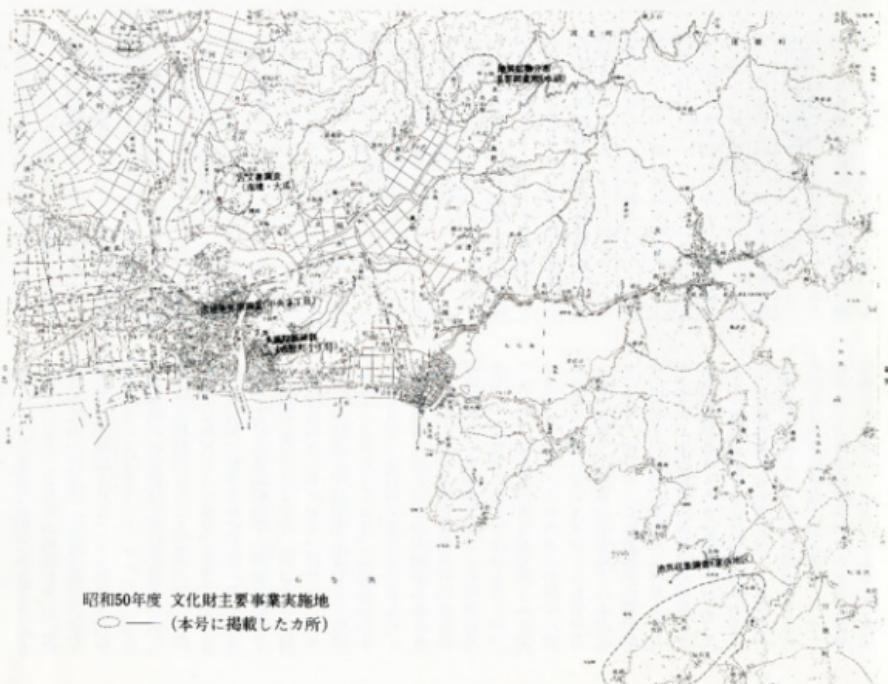
なお、今回執筆を賜わりました諸先生各位には、多大のお手数をおかけしました事について、厚くお礼申し上げないと

思います。

特に、保護委員以外に、本号のために謝意を表しあげたいと思います。

（文化財だよりの編集は、石巻市教委、社会教育課文化係で行っています。内容に関する照会、質問等ございましたら、遠慮なくご連絡下さい。

電話（035）85-1111・内線三四五）



昭和51年 6月20日

石巻市文化財だより

日輪山多福院の板碑群

一、指定について

わが国の中世期に全国各地に造立された「板碑」については、江戸時代からその所在に注意がはらわれ、寛政年代に松平定信によって編纂された「集古十種」(碑銘三部)には多数の板碑が集められています。しかし、当時は「板碑」なる呼称はなく、單に古碑として扱われていました。明治以後も、この風潮を抜け出しができず、板碑の形式、内容等に高度の仏教文化をみることができたにもかかわらず、古碑としてのみ扱われ、深く研究されることはあまりありませんでした。その研究態様は、地方の研究家によって断片的に特定地域の板碑群の調査報告がなされる程度のものであります。このように板碑研究は大きな歴史の流れの中に位置づけられることはなく、地方好事家のもの知りの材料程度であったようになります。しかし、昭和年代に入つてからは古碑としてのみ扱われていた板碑が、歴史資料として利用されることの可能性が追求されるようになりました。

板碑概説はその後の板碑研究家の指針となっています。太平洋戦争後には、板碑の最多発地区である関

東地方の板碑を精力的に調査された千々和実氏によつて「武藏國板碑集録」、二三」としてまとめられています。

このように、板碑の研究は、その内容、形式的研究とともに、近年は重要な中世期の歴史資料として見直されると同時に、文化的事業の研究に重要な役割りを果すようになってきており、その利用価値は年々、増大するばかりです。きくところによると、東京都内の板碑悉皆調査が企画され、千々和実氏のもとで、その完成がいそがれていると聞いております。身近かなところでは、矢本町史第一巻の中世編に、同町の板碑群がまとめて掲載され、石巻地方における板碑調査の重要性がやつと認識されるようになります。このように板碑研究は大きな歴史の流れの中に位置づけられることはなく、地方

事務所のもの知りの材料程度であつたようになります。しかし、昭和年代に入つてからは古碑としてのみ扱われていた板碑が、歴史資料として利用されることの可能性が追求されるようになりました。

そして、今回の調査は断碑をもらすことなく記録にとどめるという方針で行なわれたことは当を得た調査方法であり、指定の意義を一層高めることになるでしょう。

佐藤 雄一

二、概要

前記したように、日輪山多福院の板碑

群は江戸時代より、その存在が全国に知れわたっていたのです。現在境内に保存されている板碑群の総数は八十九基です。

一寺院内に保存されている數では、県下でも屈指のものであると思われます。これらの板碑は、以前から多福院境内にあつたものではないようです。かつては相当数の板碑が、多福院附近の墓地等に散在しており、それが土地整理の都度、現在地に移動されたものなのです。その

移動の過程がはつきりわかっているものは、山門に入った右側にある「南無阿弥陀仏」の刻名をもつ名号板碑です。この板碑は多福院板碑群中の最大板碑でもあります。これは、旧佛龕の前にあった池

(現在は新しい庫裡が建つたのでつぶされてしまった)を改修したときに、裏返しになつて出てきたものなそうです。このことをみても、多福院の板碑の存在状態がどんな様子であったかを知ることができます。さらに、移動のはつきりしているものは、本堂裏、吉野先帝御菩提碑の右傍にあって保存のための安置が施されている十数基の整った板碑群です。この一群は湊草刈山附近の路上に積上げられていたものを市教育委員会の文化財保護事業の一環として、昭和四十七年十二月に現在に移転させたものです。それが、ここ数年来的墓地整理の影響をうけて、現在地に移動されたものです。吉野先帝御菩提碑の右側にきちんと整理されてある一群は、前述した

ように湊草刈山より移転されたものです。市教育委員会が文化財としての板碑御菩提碑に表現されている「奉為……」という形式のものが四基ふくまれております。これは、吉野先帝御菩提碑が、鎌倉南北朝時代の形式をふまえているものとして注目され、吉野先帝御菩提碑が峰という一を背にして五基ほど整理さ

れております。この中に梵字五輪塔の刻まれたものがあります。境内では唯一のものであります。

三、研究史

多福院の板碑が最初に紹介されたのは松平定信の編集にかかる集古十種（碑銘部）であります。この中で紹介されているのは、私達が「吉野先帝御墓碑」と呼んでいる碑で、吉古寺の中では、「陸奥国鹿石巻水門里多福院山中吉野先帝碑」として載っており、他の一基は「陸奥国水門多福院碑（高さ三尺五寸幅一尺一寸）の五輪塔板碑」の一基であります。五輪塔板碑には六行六十七字ほど銘文が記されてあります。現在、この銘文は磨滅がひどく、全文を読みることはむずかしい状態になってしまっています。

多福院の板碑は明治時代以降にも、「吉野先帝御墓碑」を中心とした各神の研究書に紹介されていますが、まとまつたものとしてはありませんでした。その中で昭和初期に須田信氏（故人）による多福院の板碑群調査がなされていましたが、

発表されることなく、調査カードも埋もれてしまつたままでした。多福院の板碑群のまとまつたものが公表されたのは、太平洋戦争後に発刊された宮城県史（金石志）においてです。宮城県史（7）の「宮城県の金石文」は菊池武氏の編集によるものであり、その中の石巻市、牡鹿郡、桃生郡の調査には成藤源七氏、須田信氏（いずれも故人）の協力によるところが多くありましたとしています。おそらく、須田

氏の調査カードが最大限に活用されたものと考えられます。しかし、残念なことに板碑の形態が記されてなく、種子、銘文等に若干の誤りがみられ、多福院板碑群についての総合的な分析がなされたものではありませんでした。今回、多福院板碑群が、石巻市指定の文化財第1号になつたことによつて、その全容を掲載し、できるだけ忠実に板碑の復元に留意し、今後の研究の指針になることを心掛けています。

四、年代的広がり

多福院板碑群の中で、最古のものは、大日堂脇の小屋にあるNo.44建治の紀半銘であります。しかし、この板碑は欠落が甚しく、建治の二字をやつと読みとれるだけであります。高さは六十四cmとやや小型のものです。紀年銘を確認することができたものについて整理してみますと表(1)のようになります。室町時代が四十一基と半数近くをしめ、鎌倉時代はごく少数が確認されたにすぎませんでした。しかし紀年銘不明のものが全体の四分の一をしめる二十二基もあり、年代的広がりを確定する際の障害になつてゐるよう

とされています。

多福院における追善供養について

は表(2)のようになります。

（内）内の年号は各々に対応する南・北朝の年号

南北朝時代 年代 不明

石巻市文化財だより

多福院板碑群の逆修供養の板碑の中で興味あるものとして、服部清道氏は「板碑概説」の中に次の二基を紹介されています。

No.11 応永五年寅戌月廿八日

右志者并に不動護摩舟為志本

七分全得乃至法界平等利益也

これは不動信者の逆修供養であり、

弥陀信仰による逆修供養が多いなかで注目すべきものであります。また、こ

この板碑の種子は莊嚴体種子であるこ

とも室町時代の特徴をよく表わしてい

るといえます。

No.60 明徳三年壬申三月廿六日

以成應旨為自身七分全得、兼合

生父母並七世忌法光(思師諸門法朋

親胞貢配棟目)供給等一切含靈殿

有縁無縁平等利益故也

当時第五樞小比丘明尊敬白

この板碑は、阿彌陀三尊種子のそれ

それに蓮台を配し、その下に梵字で一

行六字、四行の光明真言が刻されています。

造立者は明尊は、ます自身の逆修

のため、兼ねて父母兄弟以下、法界衆

の平等利益を祈願して造立していま

す。他の多くの板碑が法界衆生という

総合的名稱によってあらゆる有情を表

現したのに対し、一切の靈のある有縁

無縁のものを含むという範囲を限定して

いる。

「以上二基の概略は服部清道「板碑

概説」によるも、一部を補充し

◎時代別による供養内容の分析(表三)

内 容	時代	時代別							合計
		五 百 ヶ 日	七 日	一 年 忌	三 年 忌	七 年 忌	十 三 年 忌	二十 年 忌	
七分全得	南北朝	1	1						2
	室町			1	1	1	1	1	14
	不明			2	3	1			30
	合計			1	1	1			2
				1	1	1	1	1	48

六、種子について—真言を含む—

板碑には、その上部に種子(梵字)が刻されています。種子はその一字をもつて仏菩薩を表わし、種子を刻することは仏菩薩の像を刻するのと同じ意味をもつていてことになります。それ故に、種子は板碑の中心をなすものと理解されなければならぬのです。種子の研究によつては、その一つの板碑の造立者がどのようないかを知ることができます。

この板碑は、阿彌陀三尊種子のそれそれに蓮台を配し、その下に梵字で一行六字、四行の光明真言が刻されています。造立者は明尊は、ます自身の逆修の一般的傾向をも知ることができます。この板碑は、阿彌陀三尊種子のそれそれに蓮台を配し、その下に梵字で一

◎多福院板碑群の種子(表四)

内 容	時代	種子										合計
		南北朝	室町	不明	合計	南北朝	室町	不明	合計	南北朝	室町	
口	南北朝	1	1		1					1		3
口	南北朝	1	1		1	1	1	1	1	1	1	12
口	南北朝	1	1		1	1	1	1	1	1	1	26
口	南北朝	1	1		1	1	1	1	1	1	1	9
口	南北朝	1	1		1	1	1	1	1	1	1	50

多福院板碑群における種子の表われ方

は表(4)のようあります。八十八基中の五十基を確認することができますが、

そのあらわれ方から確かな信仰傾向をつかむことはできないように思えます。しかし、この表から考察できるおおよその傾向は次のようになるであります。

光明真言が広く世に行われるようになりますと、梵字を中心とした光明真言が配されています。小沢国平氏の教示によりますと、梵字を中心とした光明真言を記したもののは非常にめずらしいとのことで、No.(9)の碑と同じく三十三年忌の追善供養碑があり、梵字を中心に行はれており、梵字で光明真言が配されています。

光明真言と板碑

なったのは明慧上人

時代からで、特に院政時代にはかなり盛んに行なわれたといわれます。しか

すなわち、種子の代表格であるとされる

●は鎌倉、南北朝、室町の各時代を通じて使用されている。特に室町時代の六基は、当時の傾向をある程度表わしているとみることができます。他の種子が各時代にわたってばらつきをみせているのに、梵字のみが室町時代に集中しているのは注意しなければならない現象であろうと思います。

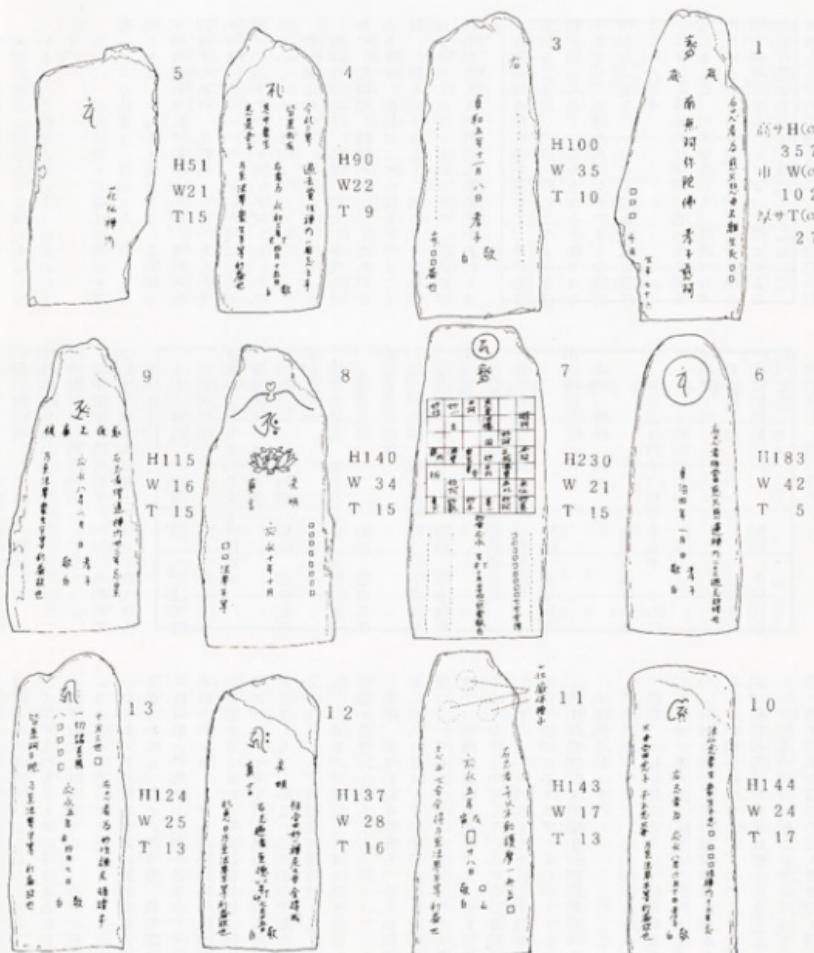
室町時代にはひらく虚空藏菩薩の信仰が広がっていたものと解することができるようです。この六基の梵字の種子のうち二基は多の種子のみであります。他の三基はいずれも真言が配されています。そして、その表われ方もそれぞれちがつてあります。No.(8)応永十年の碑は上部に簡單な天蓋、その下に梵字の種子、さらにその下に室町時代の特徴をよく表わしている蓮台が配されており、さらには梵字による光明真言が六字×四行で配されています。No.(9)応永八年の碑は庚辰年忌の追善供養碑であり、梵字の下に、横に人日報身真言が配されています。No.(10)の碑はNo.(9)の碑と同じく三十三年忌の追善供養碑であり、梵字を中心に行はれており、梵字で光明真言が配されています。

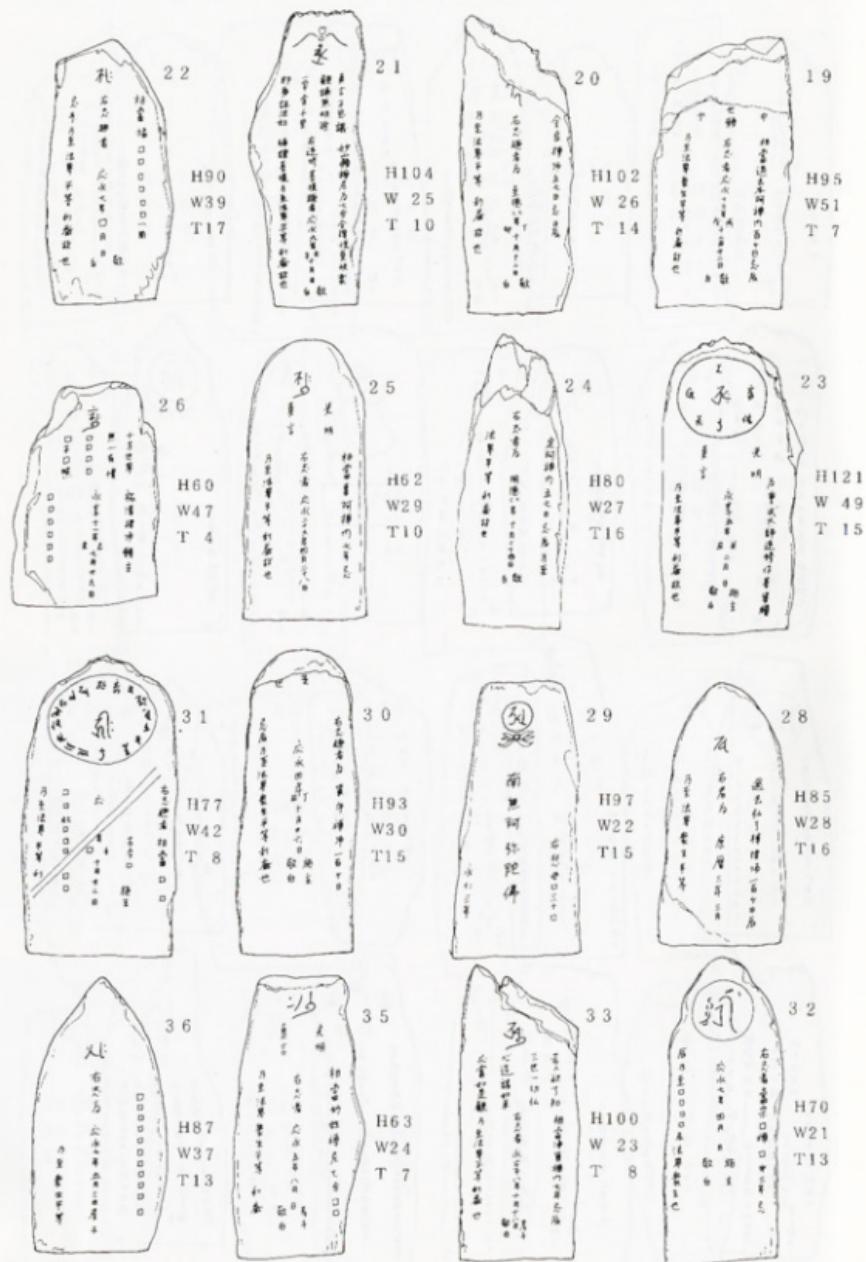
石巻市文化財だより

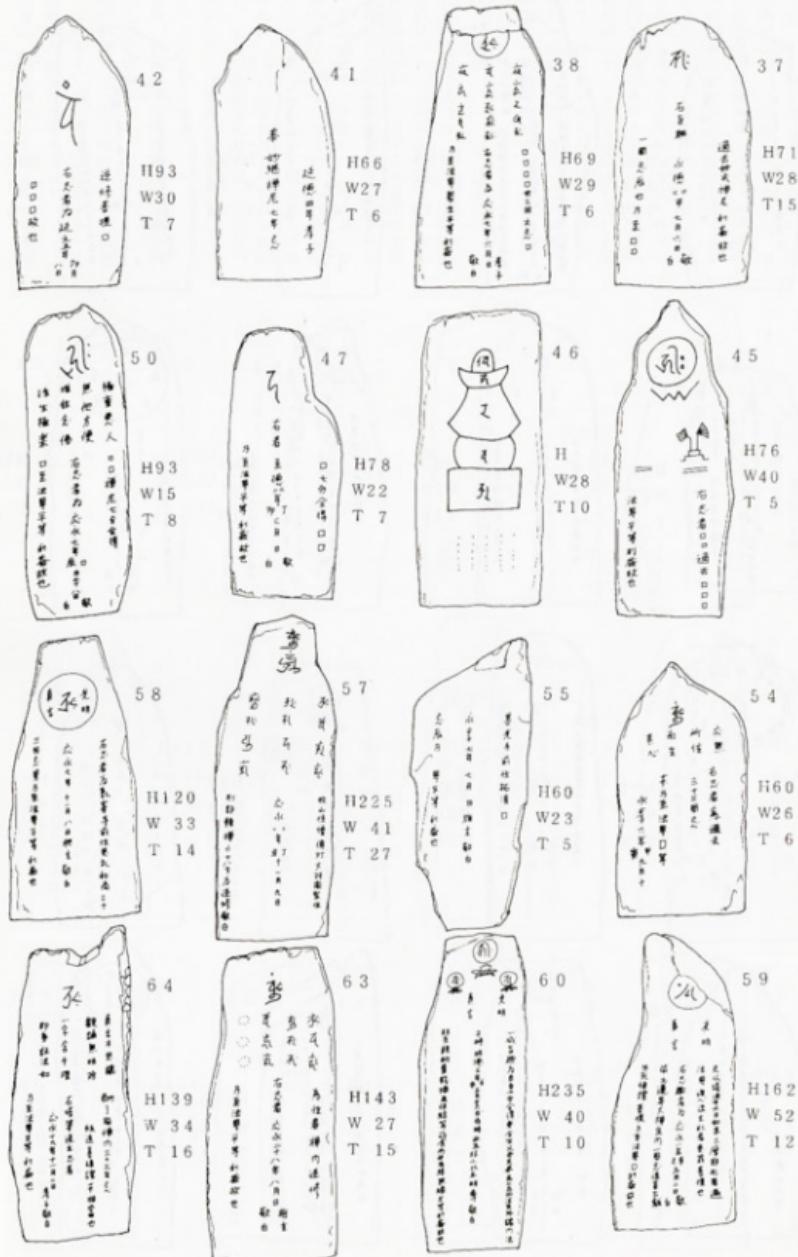
院境内に移転したもので、昭和四十七年草刈山から多福院境内に移転したものです。また車は、昭和四十七年草刈山から多福

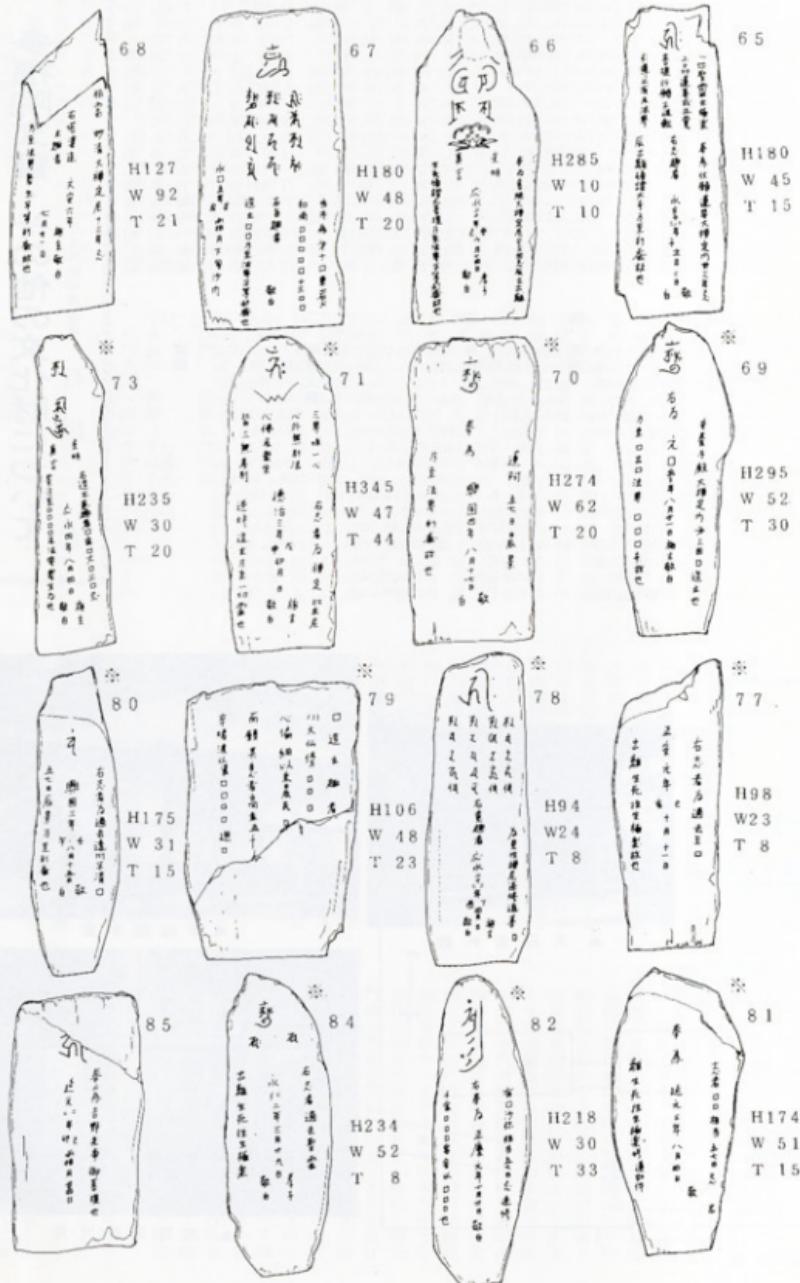
院の碑文を挙げていますが、誤りではないでしょうか。中世期に造立されたものか、後世の偽碑かという問題もありますが、解決の系口は、碑面に刻されている左の書体の研究によるのが適切な方法ではないかと思います。碑面中央にある「奉為」とあるのは草刈山より移転された板碑にも同様な表現がありますので、中世期の形式を踏んでいることは間違いないと思います。極々の彫り方は、鎌倉時代の茶研影を踏襲しております。これは他の鎌倉時代の板碑と比較の上からも間違いないと思われます。

八、むすび









昭和51年 6月20日

石巻市文化財だより

多福院文書・その他の文化財について

市文化財保護委員会

石垣 宏

日輪山多福院は、石巻市漆吉野町に位置し、曹洞宗寺院である。多福院所蔵文書によると、天台宗月光山日輪寺の跡地に、元龜元年（一五七〇）八月二十九日に、伊原山法山寺第四世の盛巣存茂和尚が開山となつて中興し、日輪山多福院と改号したとある。後山は、月光山阿弥陀峰と称し、寺内に弘安、応永、延元等の鎌倉、室町期の年号の古碑を多数有し、また、延元年中、天台宗日輪寺の時代に日野、日下向氏によって建立されたと伝えられる後醍醐天皇の苦提碑（吉野先帝御苦提碑）所在の寺として、江戸期より著名である。

寺の伽藍は、天明二（一七八三）年二月に山火事のため出火焼失したが、文化年間に第十三世太淳（諸弟和尚）によって再建されたもので、本堂は当時のものとみられる。現在の伽藍は、現住職の宗綱和尚によつて庫裡が改築された。本堂の北側に大日堂、愛宕神社があり、大日堂は寛政年間に改築されたもので、本尊は大日如来である。護良親王の陣中守本尊として秘仏とされたが、宝曆二（一七六二）年に開帳、寛政十一（一七九九）年四月二十日から十五日間開帳されている。古文書には「大宮の作」と記されているが、近年東北大の調査で鎌倉期の彫刻であることが明確になつた。

○大日如来

前述

次に今回の指定の対象外となつたものであるが、列挙しておきたい。

一、建築

○山門 創建年代不詳

○本堂 大日堂 前述

○愛宕神社・元後山の中腹にあったものを境内に移転。大漁の守護神。

二、所蔵文書

○多福院由来書上 全文後述

○過去碑（乾、坤） 天明二年の火災によつて過去帳焼失。後幕碑銘、位碑等によつて天保年間頃牛和尚の代に整理する。承応年間より記載。

三、肖像画

○一叢參竹居士之肖像 多福院の開基平胤持（多福院威一叢參竹居士）の肖像画である。

四、茶器

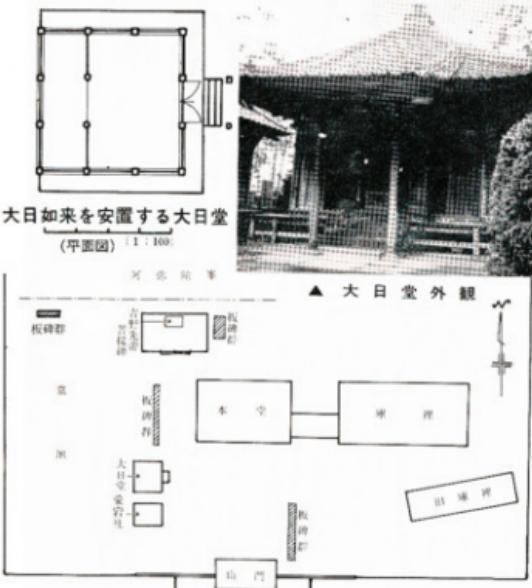
伊達興宗寄贈。三ツ引向、竹雀の紋入で仙台藩に伝わる茶器で、吉野先帝菩提碑の覆堂の完成を記念し、参拝の折、寄贈されたもの。



▲ 多福院本堂



▲ 大日堂花天井



享保ト乙巳歳、一月十七日太守公当守江
御入遊候次第左三配置候

署名刑部

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

石巻山観音兩所へ御成被遊段十六日之

夜被仰出候十七日之御迄當守へ御入遊

由ハ一円相知不申候處前二時吉野

先帝之御石碑有之由被及御聞段被仰出候

依之石之卷大軒入阿部長左衛門方分當時

祖頭本町庄次郎ヲ以直々道候間詰ニ當時

二御石碑御位碑共有之候段上候則飯後

二御郡松岡櫻左衛門殿被遊候而御位碑石

碑共二御見届ヶ被成候太守公ニ而本十七

日之四ツ半ニ御入被遊候持可罷出由

直々被呼被遊候故而隠出於佛前へ御通り

城並候間

之寺之年代尤御石碑之様

子御尋被遊候段々御挨拶申候其已後座

敷へ御入被遊候而地等御被遊座敷へ

御付被遊候手掛持直々指上候得者

色々御呪等被遊御挨拶申候其後

思想アリテ當居ニ就テ古文錄事ヲ採聞シ

テ幻住凌峰カ生ニ諸ナ聞覗ス其熱望嵩尚

スヘシ況ヤ石津今昔之落成ヲ想見スルニ

碑益盛カラズ居士読過シ而後故紙混

乱ヲ蒙ハ類聚以テ卷袖ヲ整頓新製ノ返壁

ス但シ使鑄ニ供スルノミナラズ永遠保存

ノ目的ニ適當ス因ヲ居上ニ命持ナル芳志

ヲ千葉表記シテ後覽ニ告白ス

維昭正九年六月穀旦

菩提山納寫致手識

御入遊候

大字郡遠鴨江御出駕被遊候

月十六日ニ

道候を一王子大明神与奉崇ニ今小社在之候其所風屋敷殿原小路札立場大門崎与申所在之候其跡は當寺を月光山日輪寺与申候當寺裏山月光山与申勿論案者阿弥陀案身中傳候梵文之古石碑在之候申頃日輪寺退転候延元龟年中ニ取立日輪寺を相改日輪山多福院身中候右日輪寺退転候故之年代相知不申候并弘安承永延元等之古年号之石塔寺内并門前地統御百姓持高畠之内二者数多在之候を以考候得者五百半餘ニ相見得申候

吉野先帝御位牌御座候得供文字見得不申候處近代之住持胡粉を以廉相ニ書付置候夫茂相見得不申候右御位牌御座候左書上置候得共天明二年二月出火逸失當寺御藍燒失仕其跡右御位牌焼失ニ罷成候事ニ相見得申候只令御座候御位牌者住持自分ニ安致候事ニ相見得申候一朝日天女供被成候大日尊之靈佛大宮作手申傳候尾住吉秘傳ニ而住持代之師奉拝則閉帳候誠多諸人信仰仕候尤先ニ御成之跡右御堂城遊御上観候右書上之外別案舊跡も無御座候以上

嘉永二年十月

多福院

牡鹿郡漢村



▲ 多福院文書(1)



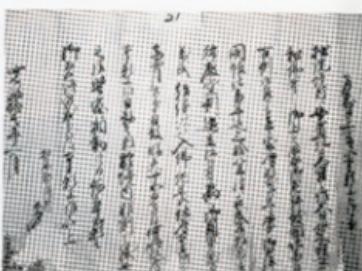
▲ 多福院文書



▲ 吉野先帝菩提碑覆堂正面



▲ 多福院過去帳



▲ 多福院文書(2)



▲ 山門の様子



▲ 茶器背面



▲ 茶器及び収納箱

石巻市稻井地方の地質

石巻女子高校教諭

菅高橋祐清輔治

一
九
四
九

ある地域を構成している岩石や地層についての自然史的な過去の事実を、明らかに記録保存していくものである。したがって、これらを野外調査し、その地域のおいたち地史を解明していくのが地質学である。

モナイト（菊石）化石がしばしば見つかり、古くから地質学者の注目を浴び、多くの人々によつて調査されてゐる地域である。

区、萩ノ浜区、平野区の三地区を設定して、本年度、補井区を七一十月にわたりて、断続的に調査した。以下その概要を報告する。そこで、多くの御教示をいたいた東北大陸理学部教授北村信氏、同助教授森等氏に厚くお礼を申し上げる次第です。

二、地圖

福井区は南部北上山地の追波川平野地帯に位置し、一〇〇～一五〇メートルの高さで、南北に走る谷間に南北に位置し、一〇〇～一五〇メートルの高さで、南北に走る谷間に南北に位置する。谷間には、砂岩からなる比較的の急峻な山地地形構成している。

三、地質

町（渡波一万石浦—女川町高田）に支配された独立峰とも見られる。

相井区は、中生界からなり、その主要な地質構成は、次の五つに大別される。

⑤ ④ ③ 下部ジユラ系の志津川層群
中・上部ジユラ系の橋浦層群
三畠系・ジユラ系を貫く火成岩類

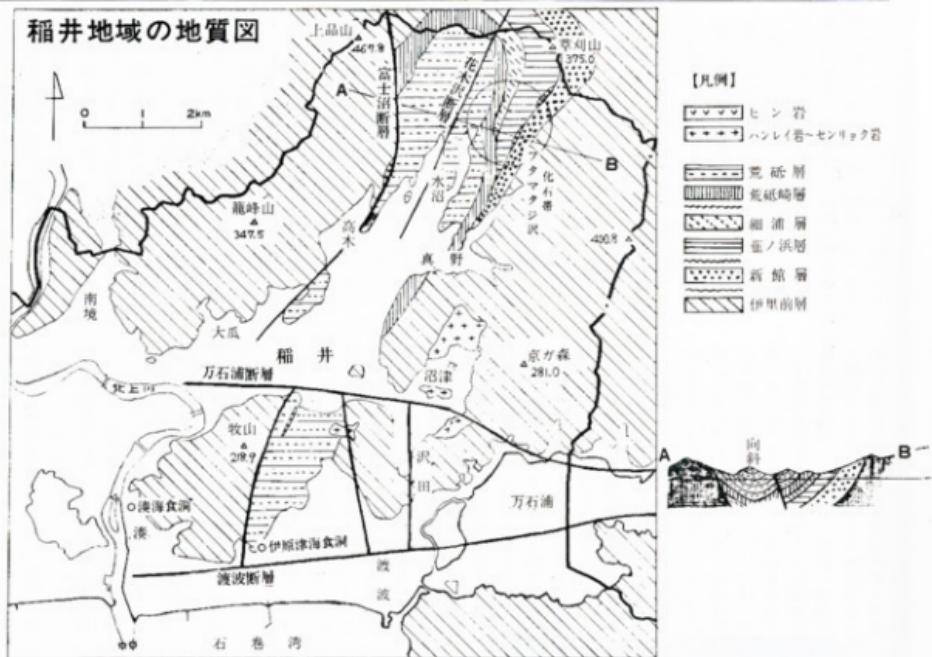
地質總括表

地質時代 層序区分	絶対年代 (億年前)	稻井地質区	
		層序	地殻変動
新生界 第四系	0.02		(地)
第三系	0.7		
白亜系	1.35		大島変動 陸地
中生界 ヨーラ系	1.80	燧浦層群 志津川層群 三貝層群	内湾 陸前変動 二陸地 潟湖
界 番系	2.25	荒砥層 荒砥層 糸浦層 韭ノ浜層 新館層 伊里前層 風越層 大沢層 平磯層	陸地 内湾 陸地 潟湖変動 内海

これら中生界の分布する本域のはば中央部を舟底状の南方に傾いたNNE-SSW方向軸の水沼向斜があつて、その両翼部に桶井層群が広く発達し、向斜の東翼部から西翼部に向かつて皿貝層群、志津川層群、鰐淵層群と並び、西翼部には機浦層群のみが分布している。また沼津付近には貫入岩体が見られる。

し、平磯層(粗粒相)・砂岩・大沢層(細粒相・粘板岩)の二層が下位のサイクルを構成する。この層は、風越層(粗粒相)・伊里前層(細粒相)がトガリ層(粗粒相)となつてゐる。本域ではこれら四層のうち、最上位にある中部三層は、系の伊里前層のみが広く分布している。

伊里前層(細粒層)は、本域の地殻を広く分布し、特に井内・渡波付近に普通に見られる。この地層は一般に灰岩質であり、中上部には砂岩層が見られる。厚さ五〇～一、六〇～二メートルで、二～數種のアンモナイト化石が発見されている。



II

(二) **皿屋層群**
稀片層群の上に不整合に重なり、岩相は浅海の内湾性を示し、その分布も水沼地方は東方への斜面地の沖積堤部に限られ、きわめてせまい範囲に分布している。より相粒相の新館層と細粒相の長ノ森層間に二分されているが、本域では新館層のみが分布している。

新館層(内ノ原層)は塊状の長石質灰岩で、色中粒砂岩からなり、基底部に礫岩が充満して、その厚さは約三〇〇米である。化石は発見されていない。

底層の上に不整合に重なり、多量の化石を含む。汽水棲・海水棲を示し、内湾奥深い潟状堆積地帯である。下位より赤井層(粗粒相)、及び細粒層(細粒相)に区分され、水沼沿岸盆地の東側にわざかに見られるのみである。

赤井層(大川層)は主に風化色砂質頁岩と灰岩中砂岩からなり、基底部に鰐卵形の礁岩が見られ、その厚さ約一八〇メートルである。化石は水沼地方小溪クタマタジ沢を中心に、二〇種程の一枚貝が化石帶を形成して多産する。

色頁岩からなつていて、下位菲ノ浜層上部より一部水平方向に移化するが、全体

としてこの上位にある。厚さは六〇米と

うすく、その分布はもつともせまい。化石も一枚貝、巻貝、アンモナイトが発見

されているが、数量・種ともに少ない。

(四) 橋浦層群(真野層群)

(五) 5

荒砥層は向斜軸部で志津川層群細浦層の上に、向東翼部で厚さ一〇—三〇メートルあって皿目層群新飯塚層の上に、そして西翼部で厚さ二〇—八〇メートルあって細浦層群の上に直接重なっている。本層は主に灰色色相・中粒砂岩で、細粒砂岩や礫岩を伴う。化石は水沼地方の小深川沢やカナゲ沢から保存の悪い多数の一枚貝が知られている。

荒砥層は、本域のジュラ系として向斜軸部に最も広く分布し、下位の荒砥層より漸移し、主に腐屑の発達した黒色頁岩からなる。厚さは四〇—六〇メートル、化石として二種のアンモナイトが発見され、もとばげである。

四、地質構造

荒砥層は向斜軸部で津田郡群細浦
の上に、向斜東翼部で厚さ一〇—二〇
メートルで厚さ二〇—八〇メートルであつて粗粒層新層の上に、そして
荒砥層で厚さ二〇—八〇メートルであつて粗粒層
の上に直接重なつてゐる。本層は主に
赤色、色相・中粒砂岩で、細粒砂岩や礫岩
を伴う。化石は水沼地方の小浜川沢やカ
ゲ沢から保存の悪い多数の一枚貝が知
られている。

小褶曲をくりかえしており、軸部にジユラ系が舟底状に分布している。

褶曲軸と調和して走向もN $20^{\circ}-50^{\circ}$ 度E方向を有し、傾斜も $20^{\circ}-50^{\circ}$ 度が一般的である。向斜軸は多少西に偏っていて、中央を花木沢断層によつて切離されている非対称の向斜構造となつてゐる。さらに、向斜の西翼の三疊系とジユラ系が接する所は西から押しあげられた衝上断層（富士沼断層）となつてゐる。それらの影響は断層や地層の走向複雑に岩などの質へ、また化石帶もNNE-SW方向に伸長している。これは、この向斜が東西方向、特に西側から強い横圧を受けたことを示している。

また、本城の南部にはほぼ東西に走る二列の万石浦断層と渡波断層があつて、牡鹿半島部と明瞭に境されている。

これら褶曲・断層の地質構造は、中生代白堊紀後半の氣仙沼付近を中心とした大島地殻変動によるものとされている。

五、地 史

① 日本付近は古生代、中半から沈降しつづけ、厚い地層を堆積しつづける地向斜の海であった。古生代後半より隆起運動（本州造山運動）のために次第に日本付近は陸化していった。

② 中生代三疊紀に入ると日本付近の大陸海岸線は、前の時代よりすつと南の方へ移り、その分だけ大陸が増大していく。このため地向斜の海も南下した。

③ その頃の南部北上山地域は西にアジア大陸が、東に古生界で構成される島々が点在していて、南方に開いた稀井海と

もいうべき公海の内海を形成していた。

この海に堆積した泥や砂は二、五〇〇米にも達し、稲井層群となつたのである。当時の稲井海には、アンモナイトが生息し、これらをえさとした魚竜がおよぎまわつていただろうし、付近の大隊や鳥々は裸子植物が繁茂していたことは化石から推察されよう。

④ 稲井海も中期三疊紀中半には歌津町を中心とした隆起運動（歌津変動）により陸化し、著しい侵食域となり、不整面を形成したのである。

⑤ やがて後紀三疊紀初めには海岸線の動搖があつて沈水し、内湾をつくり、皿貝層群を堆積させた。まもなく地殻変動（松岩変動）があつて再び陸域となつた。

⑥ ジュラ紀に入るとこれら三疊紀隆起帶も沈下し、志津川・橋浦・水沼を結ぶ長大な北方に開いた内海を形成し、水沼城はその最奥域にあつて潮状の湖を形成したものと思われる。それらは志津川層群から多産する化石群が汽水・浅海棲を示すことから、うらづけられる。

⑦ この古志津川湾も初期ジユラ紀後半には陸化（陳前変動）した。

⑧ 中期ジユラ紀に入ると海没に見舞われ、多少とも外海の入りこんだ古志津川湾よりも大きい内海をつくり、橋浦層群を堆積するにおよんだ。

⑨ こうした古生代後半より陸地となつたアジア大陸の東端に位置した、本城の中生代三疊紀・ジユラ紀に数回の海岸線の動搖のものと内湾性がくりかえされ、岩相の垂直方向変化のサイクル性を構成

◆伊原津海食洞



▲湊海食洞と珍岩岩脈



▲アンモナイト化石（水野正文氏蔵）



▲アンモナイト化石（水野正文氏蔵）
種類は鑑定していないので不明

したものである。

(1) ジュラ紀後半以降起帶となつた本城は、さらに白堊紀の一大地殻運動（大島変動）によって褶曲化し、断層帯をつくり、今日迄風化侵食域となつて残存しているわけである。

六、地質学的な文化財

稲井区は、日本の代表的中生界分布地であり、それら岩石には自然史を物語るに重要ないくつかの資源（自然文化財）を保存している。しかし、地質学的に何が自然文化財であるかを客観的に指摘することはなかなか難問であり、また、その公表がかえつていたずらに市民の稀少価値に対する懐懃を刺激し、荒廃化現象を促進させる事実を憂えるものである。それも自然への理解があれば、解消するものと信じつつ、次の四つの学術上、貴重な自然文化財を指摘し、その保護を要請するものである。

(一) 稲井産アンモナイト化石

意義 分類学的には軟体動物門・頭足綱・アンモナイト目で、古生代デボン紀にオーム貝から枝分れし、特殊化し、中生代に爆発的繁栄進化し、複雑な特殊化現象により中生代末期には絶滅した。

アンモナイトは、古生代後期に繁栄したクリメニア亜目、ゴニアテイテス亜目と中生代三疊紀に栄えたセラティテス亜目、ジユラ・白堊紀に栄えたアンモニテ亜目から構成されている。さらに分類カタゴリーの下位の科・属・種によつて中生代の時代細分設定に重要な役割をはたしている示準化石である。この他、生

物の進化、古生態、化石の成因等の問題に対しても地質学上きわめて価値の高い古生物である。

稲井区は、日本の代表的な二疊紀のセラタイト型アンモナイトの化石产地であり、その種も二〇種程知られ、発見された個体数も相当のものである。産出状態は散財的で、化石帶や化石床をつくらず、殻の反面のみが岩石に印象としてさざめいた形で残されているものが多い。半面殻的印象型化石の成因をめぐる学術論争もあつて重なるものである。

保護対策 アンモナイトを多く含有する伊里前層の分布域は石巻市域にとどまらず隣接の市町村にまたがるきやめて広範囲におよぶこと、化石含有状態がある特定域に集中しているわけではなく散在性であることから、特別指定区域を設定することは困難である。むしろ今後発見される化石が散在することの防止対策が必要である。

(二) フタマタジ沢化石帶

意義 中生界ジュラ系下部の茲ノ谷には、「一枚貝を中心とした軟体動物化石を二〇種程、数枚の化石帶をつけて、水沼地方小溪フタマタジ沢地域に分布する。これららの化石は茲ノ谷動物群とされていて、遠隔地のジュラ紀の地層と対比するのに重要な示準化石となつてゐるほか、石巻市域で有する化石帶の最大規模のものであることは貴重な資産といえよう。

特に、この海食洞が注目されるのは、洞の中心部に一米ほどの奥をもつ断層破碎带になつていて、雨水が破碎帶の石灰成分を溶解し、洞の天井に沈積させ、怪五穀、長さ三〇厘米の鐘乳石を形成していることがある。しかし現在では、付近の碎石業務と付近の住民による破壊で完全に損傷して、その原形を失なっていること、まことに遺憾である。

また海食洞付近には、三番貝に貫入し

た岩見石脈が、碎石業務によつて露出され易い事である。稲井区中生界の数少ない火成活動を示すものとして意義深い。

(四) 伊原津海食洞

茲ノ谷には、「一枚貝を中心とした軟体動物化石を二〇種程、数枚の化石帶をつけて、水沼地方小溪フタマタジ沢地域に分布する。これららの化石は茲ノ谷動物群と食制よりも規模の大きい海食洞がある。ジュラ系荒砥層の層理面の弱い所が波食によって生成されたもので、長さ五〇米、高さ五米ほどである。成因時期は湊海食洞と同じ。その意義も冲積世初期の海岸線を示す單一的なものであるが、湊

現在、洞の内部の定温性を利用しての野菜等の保存冷蔵庫として住民が利用しているが、保存度は良好である。その保護が求められる。

七、結語

今回の報告は、地質学的な一般的な考察が中心となつていて、自然文化財の詳細および精査が今後の課題となつた。また、半島部域の子備調査により、次の事項も精査の必要性があることを確認している。

一、ジュラ系の浦化石群

一、萩ノ浜付近の方孔石

一、石巻市福賀浦・牡鹿町小網倉間の道

路に見られる構造・断層構造など。

最後に、菅原・高橋が調査し、報告文

は高橋が担当した。したがつて、文の責任はすべて高橋にあることを付記して報告とする。

（主要引用文献）

小貫義男（一九六九）

北上山地地質誌

小貫義男・板東裕司（一九五九）

東北大地質古生物研報

下部中部二疊系稲井層群について

東北大地質古生物研報

高橋治之（一九六二）

牡鹿半島の中生界の層序

茨城大文理紀要（自然科学）

浅沢文教（一九七四）

金華山地域の地質 地質調査所

連水格（一九五九）

宮城県稻井村水沼地方のジュラ系地質学雑誌第六五卷第七六七号

東浜地区生産民具(漁具)収集調査報告

石巻市文化財保護委員 鈴木東行

石巻地方略図



○は浜 池の3~8が東浜地区

No.	調査収集地	No.	調査収集地
1	祝田	5	竹崎
2	佐須浜	6	狐崎
3	小積	7	鹿立
4	牧浜	8	福貴浦

一、はじめに
民具は美術工芸品などと違い、それ自体何ら芸術的価値も骨董的価値もないから、収集・保存されることもまったくない性質の資料である。したがって美術工芸品など有名作家の著名作品はその所蔵者が分明であり、その研究も大いに進んでいる。ところが、民具はわが民俗学界でも、もっとも立ち遅れになつてゐる研究分野であるから、全国的な調査・研究もまたその収集・保存も立ち遅れている実情であり、特に宮城県はその最たるものである。

民具の類は、すべてこの運命にある。むしろ実用的でない美術工芸品の方が、かえつて珍重・愛蔵せられて、偽作の書画などまでが長く保存される機会にめぐらされている。

これらの民具は日常生活に即したもの

記録し、収集し、保存しないならば、ついに、わが石巻市の基層文化——庶民の生活文化——とその変遷を知る途は断たれて、永久に忘却の彼方に失われることになるであろう。

石巻は往時より、三陸沿岸の漁港として繁栄し、今日に至つては、ここに緊急に漁具の調査・収集し、その保護・保存に努め、合せて保存漁具を通じ、石巻庶民文化の認識・向上の資となることを念じ、調査・収集することにした。

二、調査・収集の概況

調査主催者

石巻市教育委員会

調査担当者

文化財保護委員 鈴木東行

石巻工業高校教諭 南野久勝

石巻工業高校人文科学部

古牧芳孝

木村幸一

小柳・竹崎・牧浜・狐崎・鹿立

福貴浦

いられた「ツナヨリキカイ」や「ナコウド」。福貴浦では種類のちがつたいか釣用具の「イカツリザオ」・「テンビン」・「ツノ」。

福貴浦ではいか釣用の「ハネ子」、なまこ漁用の「コヒキ」。

竹浜では竹製の「ハモド」。

福田では船具の「ロ」「カイ」、佐須浜ではたの船具の「シヤリ」「オキ箱」「カギハサミ」など白製の漁具を収集することがができる。

竹浜では竹製の「ハモド」。

福田では船具の「ロ」「カイ」、佐須浜ではたの船具の「シヤリ」「オキ箱」「カギハサミ」など白製の漁具を収集することができる。

福田では福田用の「チサゴオケ」。

運用具の「ヤセウマ」・「パンドウ」。

ウ。保温用「インコ」。

なども収集寄贈された。

四、結果

古風と酷暑のもとでの調査収集は、困難を極めたが、東浜地区の人々の御協力によって、所記の収集を得た。しかし

収集調査結果について

（三）調査・収集結果

本調査

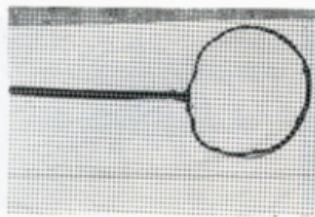
調査日程

本調査

本調査

九月二日~四日

九月二日~



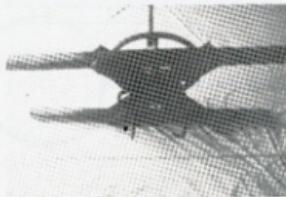
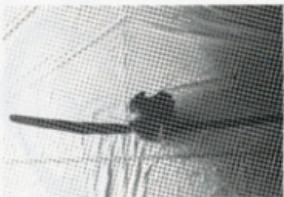
タモ
（材料…カヤの木
使用法…すずきをすくう時用いる
収集地…牧浜）



タモ
〔材料…もみの木
使用法…いわしすくい用
取扱地…福島県

新漁具の使用度の増大にともなつて、旧漁具の廃棄は日立ってきている。今後もこのような収集調査を継続し、市民一人一人が自分達の暮らしてきた生活の実態を後代の人々に伝承し、文化的な石巻市につくりあげることを念願し、結語とする。

昭和5年度東浜ならびに祝田・佐須浜漁具収集表

**アミシキ台**

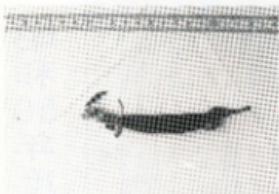
(材料…ケヤキの木(重い)
使用法…大謀網の繩網を作ると
き用いる。かぎ棒は立っている。
収集地…孤崎)

ナコウド

(材料…松・けやきなどの木
使用法…繩を一本の太い綱にす
る道具で大謀網用
収集地…孤崎)

網ヨリ機械

(大謀網用 調査地…孤崎)

**◆釣漁具◆****ツノノ**

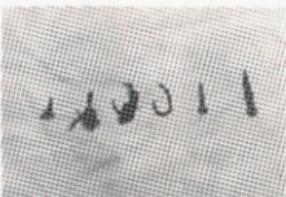
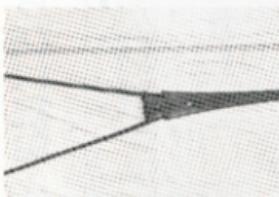
(材料…牛の角・ふぐの皮
使用法…鰓をつりあげる。擬餌
釣具
収集地…鹿島)

アバリ

(材料…竹
右2…のり網の修理工用
左2…スズキ網
調査地…佐須浜)

アバ

(材料…桐
使用法…地曳・網用のウ
キとしたもの
収集地…福貴浦)

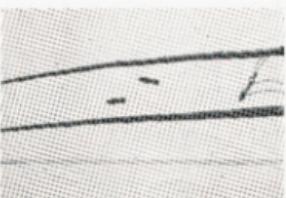
**ハネゴ**

(いか釣用 収集地…牧浜)

テンピンとツノ

(材料…テンピン柄はクワ
使用法…いか釣用)

- 左から・サバ・ソウダ經用擬餌釣鉤
- ・鯨用擬餌釣鉤
- ・マグロ一本釣用擬餌釣鉤
- ・マグロ延縄用釣鉤
- ・ツノ2 (自製いか釣用擬餌釣鉤)

**ナカゴ (延縄用)**

(材料…石・鉛・竹・ソメの木・ヒモ(化繩)
使用法…カニをまきつけ、海底を船
で静かにひいてタコをひっかけ釣る
収集地…佐須浜)

イシャリ

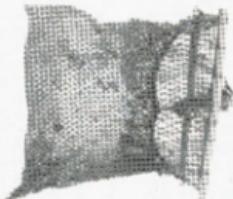
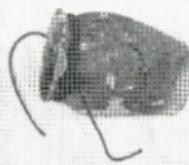
(材料…竹 収集地…福貴浦)



カギバサミ
（材料…刃は鉄、柄は杉の木で50cm、7寸位のもの）
（使用法…万石浦で水底の天然のカキをはさみ、もぎとる 収集地…佐須浜）

テングサカギ
（材料…柄は竹 使用法 1.5尺）
（の柄に深さに応じて長い竹をつけテング草を引っかきとる）
（収集地…佐須浜）

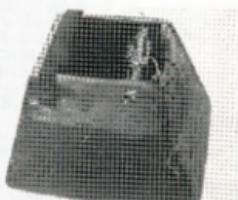
三本ヤス
（材料…竹・鉄 使用法…ネウ、カレイ、エビ、タイ、ボッケ等を船中からガラス箱でみてつく 調査地…福貴浦）



タコツボ
（材料…粘土 収集地…福貴浦）

コヒキ
（自家製でナマコをとる道具）
（収集地…牧浜）

ハモ箒
（材料…野竹・真竹・クマ笹
（使用法…筒の中に入さを入れ、オモリ（石）のついた繩（ヘナ）をつけ、海底に60度位の角度でつるし、ハモをとる 収集地…菅の浜）



アワビカギ
（材料…柄は竹、カギは鉄
（使用法…海底にいるアワビを水没させてぞき、アワビをひっかける 調査地…福貴浦）

ウシ
（材料…石・竹 使用法…主として夜に延繩が切断した場合、枝先にひっかける道具
（収集地…福貴浦）

水メガネ
（材料…ガラス・杉・ニカワ
（使用法…海底のアワビ・ワカメなどを採集するときのぞくに用いる 調査地…佐須浜）



◆船具・その他◆



夜間標識
（建網用 収集地…孤崎）

イケカゴ
（材料…竹製
（使用法…とった魚を生かしておくもの
（調査地…佐須浜）

シタナガカゴ
（材料…竹・あみ
（使用法…カゴの中にサバ・イワシなどのえきを入れ、シタナガ（ツブ）をとる 収集地…福貴浦）

成果があった。調査に入る直前に、七月に調査した家で、所蔵している古文書を、自らの届けられたのは感激であった。調査に協力してくれたことに感謝したいのである。なお、十二軒の内、六軒については第二次調査を実施したいと思つてゐる。

六、調査内容

調査によつて確認できたのは後述の目録一覧の通りである。

(1) 浅井家文書

南境竹下

十六点
水間清幸氏所蔵

(2) 佐藤家文書

大瓜棚橋

九十三点
佐藤文哉氏所蔵

(3) 長谷等文書

七点
長谷守所蔵

一九点
龍洞院文書

大瓜棚橋

龍洞院所蔵

(4) 龍洞院文書

南境竹下

杉山家文書
杉山仁氏所蔵

(5) 杉山家文書

高木西部

十六点
樺沢辰雄氏所蔵

(6) 樺沢家文書

南境竹下

七点
調査物件に関する所見

(1) 浅井家文書について

所蔵者は、南境竹下の水間清幸氏であ

る。浅井氏の子孫は、現在仙台在住である。浅井氏は、江戸時代、仙台藩での家格は八番目あたり、領内支配は「在所押領」であった。家格は「百出」であつたが、「百出」とは「伊達世臣家譜」によると、百出とは、江戸時代、仙台藩での家格は八番目あたり、領内支配は「在所押領」であった。家格は「百出」であつたが、「百出」とは「伊達世臣家譜」によれば、「百出は成吉宣を賜う日に、誌者名を呼びて以て進むる者を入り。故に国名の初めこれを呼ぶと称す。元日夏に陪する者あり、二日夏に陪する者あり、是を

六、調査内容

調査によつて確認できたのは後述の目録一覧の通りである。

(1) 浅井家文書

南境竹下

十六点
水間清幸氏所蔵

(2) 佐藤家文書

大瓜棚橋

九十三点
佐藤文哉氏所蔵

(3) 長谷等文書

七点
長谷守所蔵

一九点
龍洞院文書

(4) 龍洞院文書

南境竹下

杉山家文書
杉山仁氏所蔵

(5) 杉山家文書

高木西部

十六点
樺沢辰雄氏所蔵

(6) 樺沢家文書

南境竹下

七点
調査物件に関する所見

(1) 浅井家文書について

所蔵者は、南境竹下の水間清幸氏であ

る。浅井氏の子孫は、現在仙台在住である。浅井氏は、江戸時代、仙台藩での家格は八番目あたり、領内支配は「在所押領」であった。家格は「百出」であつたが、「百出」とは「伊達世臣家譜」によれば、「百出は成吉宣を賜う日に、誌者名を呼びて以て進むる者を入り。故に国名の初めこれを呼ぶと称す。元日夏に陪する者あり、二日夏に陪する者あり、是を

以て南境の日あり」とある。要するに毎年正月の夏に召し出される資格のある家柄で、寛永の初め頃に制度化された。

外 居屋敷 一軒
足軽屋敷 二十軒

知行地として給与されたのは、南境村全部と大瓜村の一部であった。元禄年中は、元禄十五(一七〇二)年十二月召出となり、「大番頭」の役につき、また在所として、兜郡南境城「宅一、侍雇數二〇、足輕雇數二〇軒」。山林八万九千十坪手を与えられた。所持領について、「南境村土記御用書出」(安永二年)によると、「当村福井村南境区浅井多勝邸御知行並御在所御居屋敷一軒御家臣中雇數五十軒元禄十六年御拜領御城置候。当村は貞幹元禄代山岸飛彈櫻原御領に御座候處、右子孫山岸傳三郎様元禄十五年御所督、純生郡深谷前谷地村之御移取、御跡地多精様御先祖浅井隼人様御領御領に御座候事」とあって、元禄年中に給与されたことがわかる。このような家臣に対して給地をえた方法としては、仙台藩では形式が定まつておらず、「黒印狀」と「知行目録」によってであり、この黒印狀が浅井家文書として所蔵されている。風土記による元禄年中押領について、「知行日録」によると次のようには記されている。

工事に従事するため移り、工事終了後稼故をたよって定住するようになつたということである。

現当主は、十代目であるが、その系図をたどると、

(一) 六左衛門(一)善之(二)善三郎(三)佐藤丈七(四)佐藤勘治(五)佐藤丈輔(六)佐藤勘太郎(一)佐藤健(二)佐藤透(三)佐藤文哉

となつてゐる。

古文書調査によつてみると、三代の善三郎までは記録文書はなく、四代目佐藤丈七からもののが、圧倒的に多かつた。四代目からは、「佐藤」の苗字となつてゐるが、古文書によると、二代目善三郎の代は農業兼大工で、かなりの財力を蓄えて、残り七十七石(百石)を知行し、幕末に至つた。この黒印狀は、浅井家当主、伊達家藩主の代替り毎に与えられたもので、天保十二(一八四二)年までのが保有されていて貴重な古文書である。

浅井家に関する資料としては、南境谷の高橋家所蔵の「家老留書」があり、側面からの研究を今後進めていきたいと思つてゐる。

(2) 佐藤家文書について

佐藤家は、明治時代、県議会議員をつとめた佐藤家輔氏の家で、江戸時代、代々肝入、明治になって樺井村長、県議会議員に出された名門田家である。

佐藤家の祖先については、明確ではないが、祖先は羽州で、のち岩手県東磐井郡に移住し、江戸初期に、仙台藩内での

天保十三(一八四二)年には、「知行日録」によると、「九七六文」を大瓜村の内に知行地として与えられている。

「大肝入格」に任命されている。その同代に、「や作立方、龍所起返方」へ献金して、五人扶持給付。

さらに、天保四(一八二二)年には、「大肝入格」に任命されている。その同代に、「や作立方、龍所起返方」へ献金して、五人扶持給付。

これらの記事については、龍洞院文書の「安政・一人年数改帳」にも記載がある。明治の改帳には、五代目佐藤助治(大肝入格缺勤持主)、長男支助とあり、この支助即ち支輔が六代目

石巻市文化財だより

昭和51年 6月20日

焼失しているが、山門、觀音堂、鐘楼は、災厄を免れた。その他、境内には多くの古碑、板碑がある。所蔵文書は、由緒書類、土石記、貴重であるが、明治期の火災によって、貴重な文獻も大多焼失したのではないかと惜しまれる。

所蔵されている各家では、古文書に関しては、重文として認識し、収納箱等によつて、虫害、湿氣などの防止のため配慮されておられ、嬉しいことであつた。

火災については、七月に行政委員宅を訪問した際に、高木、水沼地区は、以前火災にあつたために、そのとき大部分失われてしまつたのではないかと述べておられたが、貴重な文献ほど防火対策も必要である。

寺院文書は、歴代住職が、寺の財産として引き継がれて来ているために紛失の恐れもなく、保存状況も極めて良好であった。

(2) 保存方法と対策について

まず第一に、古文書に対し貴重な文献であり、文化財であるという認識を強く持つてほしいということである。かつては、廻の下張りに利用された例もあり、虫害、湿氣、火災に対する措置を施してもらいたいと思う。

第二に、保存の最良の方策は、市内に収蔵庫がほしいことである。虫や湿気防除、防火、管理、展览等が整つた所ではじめて保護対策が成り立つと思われるからである。一日も早く、実現することを期待するものである。

今後については、稲井地区第三調査さらに、市内の調査を急ぎ、目録作成、整備、所有者の把握を実施するつもりである。



大瓜佐藤文哉氏宅における調査風景

- 龍洞院の文書の中では、近世の典型的なものとして、和漢三才圖經（五巻）があり、全巻揃って保有されており、貴重な文献である。その未整理の文書もあるとのことであります。

（1）杉山家文書について（略）

（2）樺沢家文書について（略）

（3）高橋家文書について（略）

八、保護に関する所見

（1）保存の状況について

八、保護に関する所見

ある。

77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44

書 狀	書 狀	書 狀	書 狀
(相続願)			
繪 困 面	證 書	書 狀	和 歌
書 狀	詛 誓	書 狀	
（伊達家）御歴代惣御道抄	漢字詩書	晩翠軒道稿	
神武初學頃知 全			
植物誌			
倫理秘書			
皇國意味述讀・算術柱立・婦人三教			
二邦意			
大學			
宮城県名取郡生出村村是 氣象ト農事トノ関係			
晋右軍王公真跡十七帖			
農暇必讀 卷之二			
武家系譜			
農家必讀 初篇			
秀吉公御遺言ノ事			
豈因考察方			
栗田氏神葬略說			
屏略注			
奥羽列候志			
（三国志）講議趣意			
西都秘事談			
西洋事情			
仙府御一門御一家御一族水代着座御宿より 表裏類注偶			
千代田城大奥			
千代田城大奥			

5 4 3 2 1 6 5 4 3 2 1 7 6 5 4 3 2 1 86 85 84 83 82 81 80 79 78

● 杉山家文書

● 龍洞院文書

●長谷寺文書

柳子新論 樂天隨筆
改正宮城縣官員錄 白山院和尚全集
鹿兒島道討記 開化女用文章
即位體大嘗祭 講話資料
(市内真野 長谷寺所藏)
人字體音古昔薩
役場方等藉財事明細手扣帳 由緒書上
社鹿郡真野村風土記 写
真野風土記 写
長谷寺由來書上
長谷堂併長谷寺記
過去報
過去帳
西村櫻越人數報
當宮庫重宝記錄
和漢三才圖鑑 (全一〇五卷)
(市内高木西部 杉山仁氏所藏)
代數有之御百姓書出
高木村風土記書上永代留 肝煎喜惣右衛門
書出 牡鹿郡西方高木村本山浜法寿院大
修驗書出 牡鹿郡陵方高木村本山浜田
信昭

● 棚沢家文書

(市内南境台 棚沢隆雄氏所蔵)

一七七三(安永二)

社鹿郡陸方南境町風土記御用書出

御藏入併御給所畠改手扣写

地形地図文之事

高分譲文之事

地形水代分譲文之事

御祝儀中受手扣帳

質地証文之事

字金沢開妙見畠番号敵反間數調手扣

字金沢前番号敵反間數調帳

平賀寅傳書

浅井八五郎様方持高扣帳

契約証

明治十一年七月以降十一月迄村方所々營繕方

へ召仕人足調 南境村

重沢田御芋問數調帳

持高手扣帳

書状
御家老方御用留 高橋三郎左衛門

一七一七(享保二)

一七八四(延享二)

一七八六(天保七)

一七八三(天保八)

一八六〇(安政七)

一八六二(文久二)

一八六八(慶応四)

一八八二(明治十五)

13. 12. 11.

金華山押殿六拾分之一之領
御條目七ヶ條
御軍用金穀御備併志願調達御許客印

古建築実測調査

石巻の店蔵 △高橋茶舗

石巻市文化財保護委員会

高 橋 勇一郎

石造りであるが、この地方では見られない。

塗り造りの場合、柱の外に塗り重ねる土の厚みは、一〇cm位であるが、廣

た「福清の大火」にも耐え抜いた市田省内で最も古い「蔵造り」の店舗である。

因みに他の一件は、銭場の火事(文久三年金町は焼失)本町火事(明治二十一年五一戸焼失)である。

蔵造りは、大陸文化の影響を受けた

江戸初期からの都市集中の経済に伴な

う度々の火災は、塗り家を更に防火的にした土蔵の発達を促した。京都の町から

発達した塗り家造りから土蔵への変遷も江戸中期では法令の制限もあって、より

耐火的な「蔵造り」が発達し、次第に東北地方へ広まつた。石巻の蔵造りはほとんど江戸の影響を受けたと見られる。

度重なる火災の経験により、土蔵が、大火にも耐え得ることを知った商人は、此

の工夫を貴重な商品を扱う店舗に採用したのが「店蔵」であり、更に、住宅部分

まで土蔵造りにしたのが、「蔵屋敷」居

の工法を貴重な商品を扱う店舗に採用しなった。

江戸時代、東北唯一の貿易港だった石

巻には、早くから江戸文化が入って来た

御祝儀申手帳簿
御定写
御祝儀申手帳簿
御定写
御祝儀申手帳簿
御定写

会津征討御出陣二付
錢別申受覺紙



No. 2 ▲昭和初期の店舗



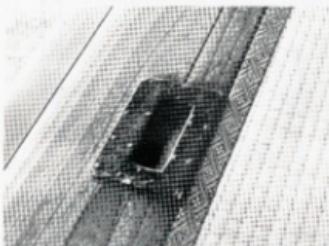
▲現在の店舗 昭和10年頃改修

高橋茶舗

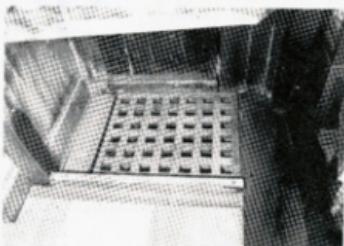
店蔵残存部写真

(昭和50年7月20日撮影)

No. 1



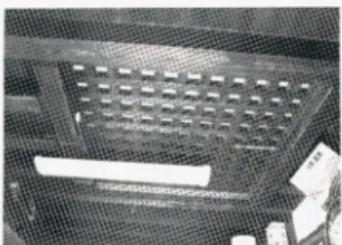
No. 5 ▲シトミ戸方立受 下部



No. 4 ▲1階 店内床下換気孔

2階▶
No. 3

No. 8



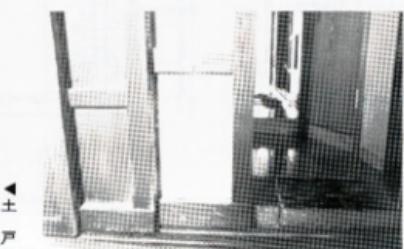
No. 7 ▲店内 天井・掲床



▲シトミ戸方立受上部金具 No. 6



No. 11

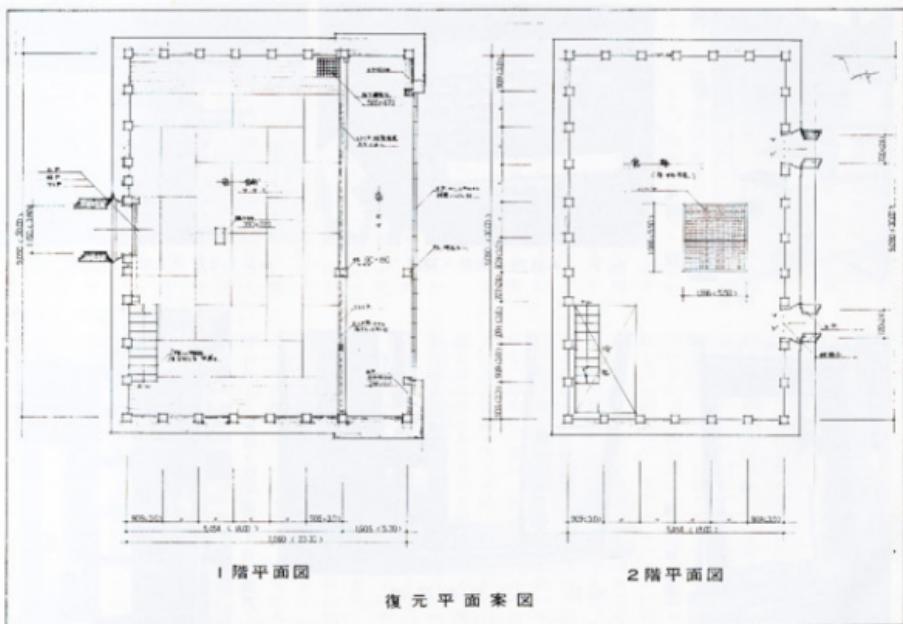
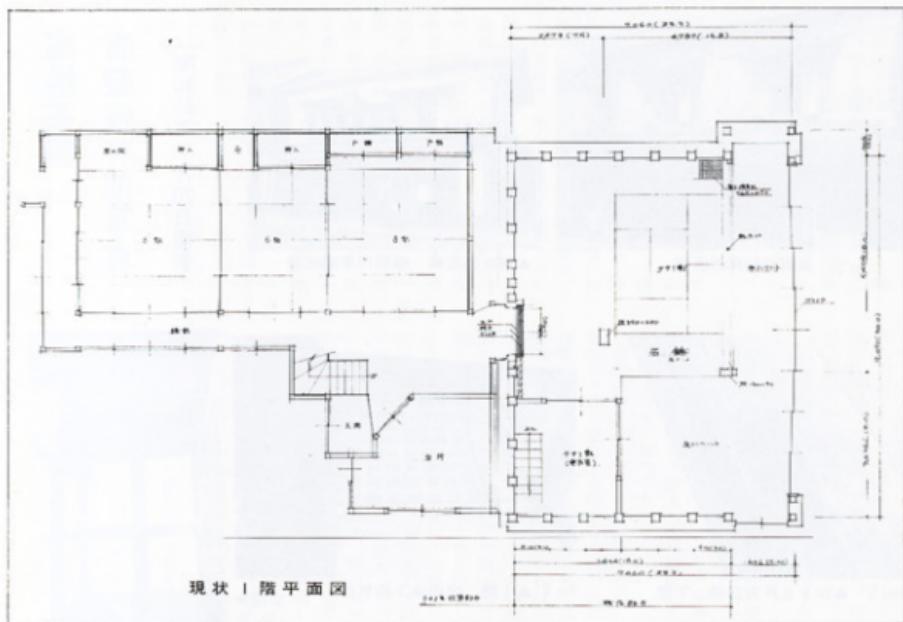


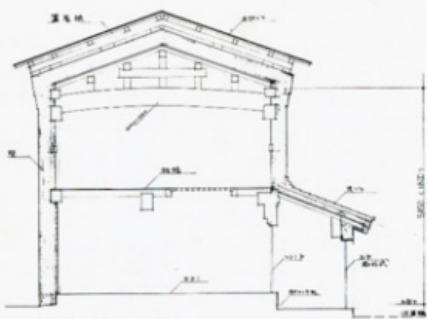
No. 10 ▲土戸 敷居部



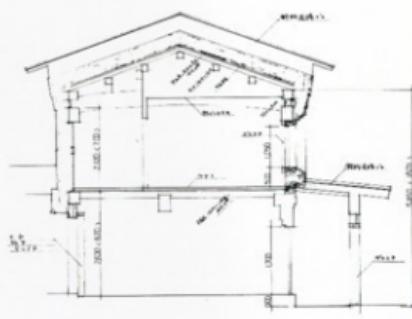
No. 9

▶店・住宅連絡入口三重戸

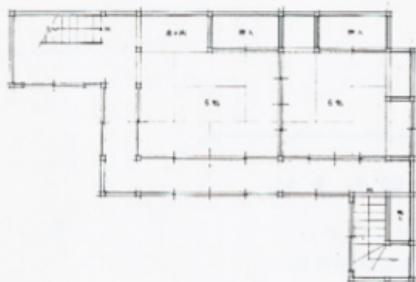




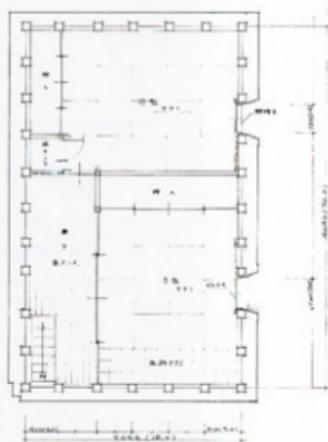
復元断面図



現状断面図



現状 2階平面図



現状 2階平面図

石巻市文化財だより

多福院特集(4号)

昭和50年度文化財調査特集(5号)

昭和51年6月10日 印刷

昭和51年6月20日 発行

発行 石巻市教育委員会
石巻市日和ヶ丘一丁目1番1号

監修 石巻市文化財保護委員会

印刷 開北社印刷所
石巻市中央二丁目7の6
